

観光まちづくりレポート

長谷寺門前町再興に大学との協働で取り組む

～奈良県桜井市初瀬～

飛鳥時代に創建された長谷寺（桜井市初瀬）は、平安期に盛んになった観音信仰の霊場として平安貴族が盛んに訪れ、たびたび「源氏物語」「枕草子」を始めとした平安文学の題材として登場する。

時代が下っても、新義真言宗豊山派の総本山、西国三十三観音霊場第八番札所として多くの参拝客で賑わい、古くから門前町が形成され、また、伊勢街道に面することから、江戸期には宿場としても盛んになり、門前のまち並みは、今も往時の歴史を感じる趣を残している。しかし、近年は、住民の都会への流出が進む中、古くからの建築物が取り壊され徐々に活気が失われつつあることは否めず、まち並みとまちの活気再興に向け、県や早稲田大学との協働を交えた住民の取り組みが始まった。

古刹「長谷寺」と賑わいを見せた門前町

桜井市初瀬は奈良盆地東部から伊勢方面へと続く山間部、大和川の上流である初瀬川（はせがわ・はつせがわ）に沿った溪谷部に位置する。古くから「こもりくの」と枕詞を付けて、「初瀬」や「泊瀬」と表され、万葉集で柿本人麻呂などの歌にも詠まれている。

「こもりく」は「隠国」「隠口」などと書き、両側から山が迫り、それに囲まれたような場所を指す。付近には、第21代雄略天皇が宮を営んだ泊瀬朝倉宮伝承地もあり、飛鳥に都が移されるまで古代王権の都であり、美しい山並みと清流に恵まれた当地は、古代の人々にとってはまさに「心のふるさと」であった。

その初瀬川北岸の初瀬山中腹に、686年（朱鳥元年）、道明上人により創建された「長谷寺」は、古く飛鳥時代から篤く信仰され、「古事記」「万葉集」にもたびたび登場する。

727年（神亀4年）に徳道上人によって「十一面観音堂」が建立されてからは、貴族の間に観音信仰が起り、平安期には、観音霊場として平安貴族が盛んに訪れ、「源氏物語」「枕草子」など多くの古代文学の題材ともなっている。

その後も、西国三十三ヵ所霊場の根本霊場として、また、第八番札所として、巡礼の人々が絶えず、鎌倉期から室町期にかけて門前町、宿場町としてまち並みが形成された。さらに、伊勢街道にも面することから、江戸期には、お伊勢参りの人々でも賑わい、まち並みは、本陣を始め、旅籠や様々な商家が立ち並び大いに栄えた。



長谷寺本堂は、観音信仰の中心的な役割を果たした重要な建築として国宝指定。本尊十一面観世音菩薩立像（重要文化財）は、像高三丈三尺六寸（10m18cm）と、我が国で最も大きな木造の仏像である。



春には山一面の桜の雲に長谷寺の伽藍が浮かぶ。また、唐の皇后・馬頭夫人の献木を、今に植えついでといわれる150種7,000株の牡丹は日本一を誇る。

（全ての写真提供：NPO法人泊瀬門前町再興フォーラム）

現在では、新義真言宗豊山派の総本山として、全国各地に末寺が三千寺余、檀信徒はおよそ三百万人といわれ、また、「花の御寺」としても人気が高く、牡丹、桜、紫陽花などが周年咲き誇り、賑わいを見せている。

歴史をしのぼせる佇まいの門前町は約1kmあり、古くからの旅館のほか、名物のよもぎの草餅、



門前町には、長谷寺別当を務めた廊坊家、本陣を務めた田中家、国の登録文化財山田家、油商を営んだ的場家（写真上から、いずれも江戸期の建築）など、多くの歴史的な建築物が趣のある佇まいを残す。

吉野葛を原料とした和菓子や葛きり、柿の葉寿司、三輪素麺など南大和の土産物を商う店が立ち並び、関東などからの遠来の観光客、参拝客も多いという。

NPO法人泊瀬門前町再興フォーラムの発足

（１）高齢化が進むまちの活性化を目指して

信仰のまちとしての歴史と、水と緑の自然に恵まれて発展してきた長谷寺門前町であるが、近年は、ここでも過疎・高齢化が進んでいる。

若い世代が進学や就職で利便性の高い都市部に流出し、高齢者比率が高まるにつれて徐々に活気が失われ、また、後継者不足で空き家が増え駐車場になるなどして、かつてのまち並みも変化してきた。

そこで、伝統を守りつつ住環境の近代化を図ることで、若者の地元定着化と高齢者が安心して住み続けられる環境づくりを推進し、さらには、毎年、当地を訪れる数多くの観光客、参拝客の滞在を増やすことにより、交流人口と定住人口双方の増加を図り、かつての賑わいを取り戻そうとする住民が立ち上がった。

平成17年1月、地元の有志10名余りが発起人となり、まちづくりNPO設立に向けての取り組みが始まり、そして、同年10月に、「特定非営利活動法人（NPO法人）泊瀬門前町再興フォーラム」が正式に設立された。

（２）住環境の近代化に向けて

若者の定住を進めるという方向性としては、住環境の近代化がある。

これには、歴史のある建築物を、先人の知恵を生かしつつも、冷暖房、水回り、間取りなどで不便な点は近代化していくことが重要であろう。

同フォーラムでは、そのような面での取り組みを進める一方、最も力を入れてきたものが、住民の生活環境とも言うべき下水道の整備である。

清らかな溪谷の維持を含めた地域環境の近代化整備を通して、地域住民の皆が連帯感を持ち、積極的な町づくりへの参加も視野に入れたものである。

少子高齢化の進展とともに、失われつつある地域コミュニティの再生、また、高齢者と若者、旅行者と地域住民が触れ合う拠点づくりが目標である。

（３）なら・まちづくりコンシェルジュとの協働

「泊瀬門前町再興フォーラム」の活動がゆっくりではあるが徐々に拡がりをみせるなか、平成20

年度からは、奈良県が創設した「なら・まちづくりコンシェルジュ」との連携もスタートした。

これは、歴史的なまち並み地区において、まちづくり活動やまちなかの魅力創出を地元との協働で推進するため創設され、空家対策、地域交流の場や協働の機会づくりなどを指すもので、いくつかの協働先候補の中から、同フォーラムが選定された。

この協働の中で、長谷寺門前町の歴史的なまち並み保全やまちなかの魅力創出とともに、観光客、参拝客の増加を図るための検討会やワークショップ活動が行われた。そして、その第一歩として、地域資源の収集・発掘により、まち歩き用に「まちづくりマップ」が作成され、まち歩きツアーの開催時には多くのまち歩きファンが集まった。

まちづくり拠点整備ファンドでもてなしのまちづくり

歴史のある建築物の老朽化が進み、まちの景観が損なわれていくのと同時に、駅から長谷寺に至る参道に、参拝客が一休みできる場所や公共トイレがないのが長年の課題である。

同フォーラムでも、遠路訪れる観光・参拝客のための「もてなしの休憩所」の整備など、ハード面での整備が急務と考えていた。

ただ、その資金的な面がどうしても問題になるが、全てを行政に頼ることも難しいことから、住民自らの連携で資金の調達をステップアップして行こうと、「奈良県まちづくり拠点整備推進事業」に応募することとした。

この制度は、奈良県が、財団法人民間都市開発推進機構（民都機構）の「住民参加型まちづくりファンド支援制度」と連携して行うもので、歴史的な町並み地区において、地域のまちづくり拠点施設整備に資金拠出する「まちづくり拠点整備ファンド」づくりに資金支援するものである。

そのスキームは、民都機構がファンドを設置したいとするNPO組織等を「景観整備機構」として指定し、そこに資金拠出を行う場合、奈良県も同時に資金拠出を行うというもので、同フォーラムでは、地元住民、観光事業者等の地元企業などから500万円の寄付を集め、さらに桜井市から500万円の拠出を受け地元で合計1,000万円を調達。そして、民都機構と奈良県からそれぞれ1,000万円の拠出を受けて、合計3,000万円のファンド設

置にこぎつけた。

同フォーラムでは、この資金により、元は食堂を営み今は空家となった「相馬屋食堂」を改修し、観光・参拝客の休憩施設として、また、地域の高齢者のケアや、年齢に関わらず来訪者と住民、また住民同士が交流を深めるコミュニティ広場としていく予定である。

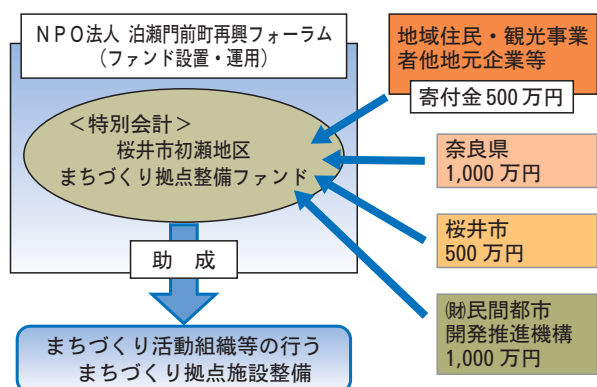


賑わったまち歩きツアー



拠点化が目指される「元相馬屋食堂」

まちづくり拠点整備ファンド（景観整備機構型）スキーム



門前町再興に向けて早稲田大学と連携

奈良県と早稲田大学は、平成20年12月、相互に協力し、学術・文化、地域社会の発展と人材育

成を目的として、包括連携契約を締結した。

この連携協定締結を契機に、奈良県は、早稲田大学の知的資源を活用することにより、県政の課題に対応していく「早稲田大学と奈良県との連携事業」を5つのテーマで実施しているが、そのうちの1つとして「初瀬門前町における景観まちづくりの推進」が選定された。

そして、平成21年、「NPO法人泊瀬門前町再興フォーラム」を中心とした地域住民と、早稲田大学の研究チーム、そして奈良県の協働によるまちの活性化事業が開始された。

11月に、早稲田大学からは、住民参加による



早稲田大学による現地調査と住民を交えた検討会

まちづくりの方法の技術開発に取り組む同大学理工学術院の佐藤滋教授の指導の下、同教授が所長を務める「都市・地域研究所」の研究員、同大学学生によるチームが現地入りした。

調査によるマップ作り、ワークショップの立ち上げなどに着手し、門前町の観光・景観資源となりうるスポットの選定や、まちの将来像を検討した。

平成22年3月には、第2次調査が行われ、個店のヒアリングを始めとした現地調査や、地域資源として選定しスポットの現況調査、また、町家の外観の目視調査などを行い活用の可能性などが調査され、さらには地元とまちづくりの進め方などについての意見交換会を実施した。

第2期目となる平成22年度の活動としては、平成22年7月、地元ヒアリングや景観調査を実施し、それらの成果を踏まえて、まちなみを200分の1に縮小したジオラマ模型も制作された。

そして、これまでの調査研究成果の報告として、初瀬川の景観利用や山すその古道の復活・整備などの具体的提案を元に、生活の場としての良さの見直しと、観光と景観まちづくりの一体的な取組みについて展望を拡げた。

失われつつあるコミュニケーション再興を目指し

古くからの華々しい歴史を持つ初瀬地区であるが、まだまだ住民自身知らない、あるいは身近過ぎて気付かない歴史が埋もれている。「源氏物語玉鬘たまかざらの巻」のエピソードにみられる「二本杉」ふたまたのすきが今も長谷寺境内に残っているというのも趣のある話である。

「泊瀬門前町再興フォーラム」では、まちの歴史文化の掘り起こしやまち並みの整備により、観光客、参拝客にもてなしの心を持って接し、産業も含めたまちの活性化を図りたいとの思いと並び、若者に自分が生まれた土地に誇りを持ち定住してもらいたいとの思いも強い。

そして、今後、高齢者の増大が予測されるなか、安心して暮らし続けられる地域環境の整備も急務となるなか、近年、多くの地域でみられる地域コミュニティの衰退に歯止めをかけ、年齢を問わず、また、来訪者、地元住民を問わない、ふれあいの場、ふれあいの機会の創出に向けた取組みを進めている。

(山城 満)